

2019年4月に始まった本コラムは今号で最終回です。執筆いただいたお2人に、現在の状況や今後の展望などについて伺いました。

生活保護、世論の後押しで改善へ

——コロナ禍において、生活困窮者をめぐる県内の状況をどうみますか？

西山 先日、飲食店で働くシングルマザーの方の記事が新聞に掲載されました。子どもがいて日々の生活も大変なところに、コロナで収入が激減してさらに厳しい状態に追い込まれました。その後、私が支援して生活保護を受けることができ、何とかやりくりできるようにはなりました。

弁護士 西山 貞義

反-貧困ネットワークとやま共同代表

松浦 万里子

反-貧困ネットワークとやま共同代表

元金城大学社会福祉学部教授

ケースワーカーの体制充実を

松浦 富山は、貧乏は恥の意識が強いと感じます。それが困窮者の問題を表面化しにくくしている。昨年春の長期休校中にお昼ごはんが満足に食べられない子がいることに気づき、その子達に手作り弁当を届けていたのですが、お米を買うことが困難な家庭に何軒も出会いました。お昼ごはんは「茶碗一杯のごはん」に

最近、駅の地下で生活するようになったホームレスの方が2人います。コロナ禍で派遣切りに遭い、寮を追い出された方々です。その2人が生活保護の申請に行ったのですが、役所の窓口で追い返された。住まいを失った方ですよ。以前は申請に行く窓口に不動産業者を紹介されて、賃貸住宅の契約を終えたところで申請を受け付ける、という対応でした。不適切ではありますが住まいを用意すれば申請を受け付けるという面では、一歩前進だと思っていました。ところがそこから後退してしまっ

松浦 最初は孫の友達から「お昼ごはんがない」と聞いて、我が家の分を余計に作って届けていたら、子どもたちの間で広まって、最終的には20人を超えていました。これは私の住む住宅地での話です。多くはシングルマザーの家庭でした。結婚して家を建ててから離婚をし、生活困窮に陥ってはい

松浦 富山は、貧乏は恥の意識が強いと感じます。それが困窮者の問題を表面化しにくくしている。昨年春の長期休校中にお昼ごはんが満足に食べられない子がいることに気づき、その子達に手作り弁当を届けていたのですが、お米を買うことが困難な家庭に何軒も出会いました。お昼ごはんは「茶碗一杯のごはん」に

松浦 富山は、貧乏は恥の意識が強いと感じます。それが困窮者の問題を表面化しにくくしている。昨年春の長期休校中にお昼ごはんが満足に食べられない子がいることに気づき、その子達に手作り弁当を届けていたのですが、お米を買うことが困難な家庭に何軒も出会いました。お昼ごはんは「茶碗一杯のごはん」に



2時間弱にわたってお話いただいた西山さん(右)と松浦さん(左)富山市内

は微増だそうです。生活保護の代わりに何が増えているかというと、融資です。返済する余力がない人に融資してどうするのかと。

松浦 本来は生活保護を申請すべきケースでも、それを勧めようとしていない。福祉行政が役割を果たしていないのです。

松浦 最大で80件、通常は60件がそれ以下でないと個々の困窮者に寄り添った対応はできないでしょう。福祉事務所のワーカーが少ないのであれば増やす必要がありますし、専門知識も必要です。

西山 医療費の窓口負担が支払えないという方は、何かしらの社会的支援を必要とする方がほとんどだと思います。なぜ払えない状態になったのかを考え、支援の手を差し伸べていただきたいです。生活保護に結び付けば、医療費が支払えるようになり、医療機関にとても良い結果に繋がると思います。

松浦 富山は、貧乏は恥の意識が強いと感じます。それが困窮者の問題を表面化しにくくしている。昨年春の長期休校中にお昼ごはんが満足に食べられない子がいることに気づき、その子達に手作り弁当を届けていたのですが、お米を買うことが困難な家庭に何軒も出会いました。お昼ごはんは「茶碗一杯のごはん」に

過去に掲載した「県内の生活困窮者のいま」を協会ホームページで読むことができます